阿波藍の製造方法と五軒の藍師の家

The Production Method of Awa Natural Indigo and Its Use by Five Indigo Farmers

川 人 美洋子

産業分類で言いますと……

植物の藍を栽培する工程は農業ですから、産業分類で言いますと、一次産業です。その藍を原料に加工しますと、それは製造業、すなわち二次産業の範疇に入ります。販売もしますから小売業でもあり、三次産業とも言えましょう。一次産業としては、3月の種まきから8月の刈り取りまで、二次産業としては、8月の葉藍(乾燥した葉で、阿波藍の原料になる)の作成から1月まで続く葉藍の発酵まで、三次産業としては、12月以降の出荷の作業に分類されます。このように、阿波藍を製造する藍師の仕事は、1年に及ぶ仕事ですし、小規模ではありますが、農業、製造業、および小売業までの範囲に渡っています¹⁾。今回は、農業および製造業の分野について記します。

一次産業(農業)の仕事^{1,2,3,4)}

徳島県で栽培されている藍植物は、タデ科の小上粉(こじょうこ)です。一年草で、学名を *Polygonum tinctorium* Lour.(図1)と言います²⁾。花の色は淡い紅色と白色です。藍植物の種類は豊富ですが、阿波藍を製造するには、この品種が適しているようです。阿波藍製造業は、長い間徳島県の経済を支える程の大きな産業でしたから、様々な検討が行われた結果、この品種に至ったのだと思います。

藍の栽培方法を、簡単にご紹介します。3月の大安の日を選び、藍の種(図1)を、7g/m²を目安に苗床に撒き、種が隠れる程度の砂をかけます。約1ヶ月後、約2~3cmに

藍の種。

図1 *Polygonum tinctorium* Lour.

MIYOKO KAWAHITO
徳島県立工業技術センター 専門研究員
工学博士
〒770-8021 徳島県徳島市雑賀町西開
11-2
Tel: 088-669-4711 Fax: 088-669-4755
E-mail: kawa@itc.pref.tokushima.jp
〈専門〉染色化学
〈趣味〉ホームスパン

なった苗を間引きし、2~3本/4cm²の割合で残します。さらに約1ヵ月後、苗床に水をやり、土を柔らかくし、約20cmに成長した苗を4、5本にまとめて抜き取り、ワラで束ねます。根に水分を保たせ、畝幅80cmの本畑に、40cm間隔で移植します。6月には、藍の葉が成長します。葉の収穫は1年に2回行います。通常、7月に1回目の刈り取り(一番刈り)が行われ、その後藍の葉が再生しますと、8月に2回目の刈り取り(二番刈り)を行います。

藍を栽培する農家は、藍師(藍染料の製造者)の家だけではありません。藍作農家は、1967年は134戸、1985年86戸、2000年は92戸ありました⁴⁾。藍作農家の仕事は、栽培までの場合もありますし、刈り取りまで行う場合もあります。いずれにしても、藍師だけの藍栽培では足りません。藍作農家の協力が不可欠です。しかしながら、他の日本の農業と同じように、藍作農家も高齢化や廃業といった大きな課題を抱えています。なお、栽培面積に対する阿波藍産出量は、1967年から2005年までの記録では、約0.26Kg/m²と安定しています⁴⁾。

二次産業(製造業)の仕事

刈り取った葉は、直ちに畑から藍師の家の庭に移され、裁断機にかけられます。その裁断された葉藍は、裁断機の吹き出し口から出てきて、扇風機の風で飛ばされます(図2)。藍の葉は茎より軽いので、その風で、茎より遠くまで飛んでいきます。つまり、重さの差によって、藍の葉と茎が選別されます。茎にインジゴは含まれていませんから、阿波藍の原料にはなりません。茎は集められ、他の場所に移されます。

選別された藍の葉を、藍師の広い庭に広げ、天日で乾燥します(図3)。この作業を「藍粉成し」(あいこなし、「粉成し」の表記は引用文献1による)と呼んでいます。庭に広げられた葉をほうきで掃きながら、葉を裏返し空気を入

裁断機にかける。

扇風機で飛ばす。

図2 裁断し、葉と茎に選別する(佐藤家)

図3 十分に天日乾燥する

れ十分に乾燥します。天日乾燥には2日かけます。このとき、雨よけの屋根のついた乾燥場を使う藍師もいます。或いは、乾燥機を用いますと乾燥時間は短くなりますから、乾燥機を導入している藍師もいます。十分に乾燥した藍の葉(葉藍)が、阿波藍の原材料です。乾燥が不十分だと、良い阿波藍が出来ませんから、天気の良い日を選び、その作業が繰り返されます。葉藍は「ずきん」と呼ばれる専用の藁の袋に保存されます。

9月になりますと、保存しておいた葉藍を寢床(すくもの製造場所、図4)に入れます。その床は、碎石(砂利)、砂、もみガラ、粘土を重ねて作られています。寢床には、換気用の窓が必ず作られています。

新居家.

武知家(写真:武知毅).

図4 寢床

阿波藍の最初の製造工程を「寝せ込み」と言います。1床(ひととこ)当り3,000Kgから3,750Kgの葉藍を積み、同量の水(3,000Kgから3,750Kg)をかけて混ぜ合わせ、約1mの高さに積み上げます¹⁾。寝せ込みの後、5日毎に葉藍に水を打ち混ぜますが、この工程を「切り返し」と呼んでいます。木製の道具「四ツ熊手」(図5)で葉藍を掻き寄せ、木製の道具「はね」(図5)で返し、竹製の「こまざらい」(図5)で混ぜた後、元の高さに集め、「ふとん」と呼ぶ「むしろ」をかけます(図6)。このような「切り返し」を続け、

四ツ熊手.

はね.

こまざらい.

図5 道具

図6 「ふとん」をかける

4度目の作業時に、二番刈りの葉藍を加えます。この工程で、最も重要な作業の一つが、「水打ち」で、「水師」と呼ばれる専門の職人がこの作業を管理していましたが、現在は「藍師」がこの作業を行っています。

10月から11月にかけて、刈り取りを終えた藍畑には藍の花が咲きます。畑一面、白や淡い紅色の美しい景色が広がります。

図7の写真は、2007年1月6日に撮影したもので、その日の天気は晴れ、最高気温12℃、最低気温6℃の中でも、作業場である寢床では、湯気が立っています。「切り返し」の作業中、阿波藍の発酵が進み発熱している様子が窺われます。

「切り返し」を12~13回行った後、10月下旬にむらなく発酵するように、阿波藍をくぐります。この工程を「通し」と呼んでいます。通しは11月に、17~18回目の「切り返し」の後にも行われます。合計22~23回の「切り返し」で阿波藍は仕上がります。藍師によって、阿波藍の製造時期が若干異なりますが、9月から1月の間の90から100日かけて仕上げます。

阿波藍は、藍師の屋号の印を押して「吠(かます)」に入

図7 湯気が立つ寢床

図8 吠に入った阿波藍

図9 徳島県藍商繁栄見立一覧表

れられ(図8)、1俵15貫(約56.25Kg)詰められ、日本全国に出荷されます。

たった五軒の藍師の家

2008年現在、阿波藍を製造する藍師は、徳島県にたった5軒しかありません。その5軒の藍師の家をご紹介します前に、明治29年発行の「徳島県藍商繁栄見立一覧表」(図9)をご覧ください。ここには、426人の藍商の名前が記載されています。1軒の藍商が、何人も藍師の製造する阿波藍を販売していましたから、当時の藍師の人数は今とは比べものになりません。正確な数字はわかりませんが、多くの人々が藍を製造し、販売していたのでしょう。阿波藍が産業としての地位を確立していたことを、この図は示しています。

現在は、わずか5軒のみとなり、その藍師自ら阿波藍を製造し販売していますので、かつての藍商は、存在しません。5軒のうち、3軒が専業で従事していて、それぞれに後継者がいます。日本国内で、天然藍を製造し販売することによって生計を立てているのは、稀有なことになりました。また、兼業の2軒も伝統的な方法を守り、阿波藍を製造し販売し続けています。それでは、5軒の藍師の方々をご紹介します。

佐藤家(佐藤昭仁氏)

佐藤家は、徳島県内でも有数の藍師の家です。1985年と2000年の阿波藍の製造実績についてお話を伺いましたところ、佐藤家は、1985年に徳島県で製造された阿波藍

の約49.5%、2000年に約49.0%を製造しています。

佐藤家の入り口には、石碑があります。そこには、阿波藍製造法と手板法の技術保持者(上板町指定無形文化財・工芸技術)であることが記されています。当主の佐藤昭人氏は、徳島県北東部の板野郡上板町に住む専業の藍師で、阿波藍製造技術保存会の会長です⁵⁾。長男で後継者の佐藤好昭氏はその会の準会員です。阿波藍の製造技術は、文化庁から選定保存技術に選定され、この保存会は、保存団体に認定されています。

佐藤家は、佐藤阿波藍製造所を営み、1年を通じて阿波藍の製造販売に携わっています。

新居家(新居修氏)

徳島県板野郡上板町の新居家の当主新居修氏は、有限会社新居製藍所の代表取締役で阿波藍製造技術保存会の会員です⁵⁾。後継者の新居俊二氏は、その準会員で、専業として修氏と共に阿波藍の伝統を守っています。新居家は、1985年に徳島県で製造された阿波藍の15.0%、2000年には34.3%を製造しています。

新居家はもともと藍商の家で、阿波藍を販売していました。福岡県や山口県へも出荷し、その得意先名簿が残っています。

外山家(外山良治氏)

徳島県名西郡石井町の外山家の当主は、外山良治氏で、阿波藍製造所外山を営む阿波藍製造技術保存会の会員です⁵⁾。長男で後継者の外山貴規氏は、その準会員で、専業

として良治氏と共に阿波藍を製造しています。

外山家では、阿波藍の製造以外にも「茎ずくも」も製造しています。もちろん主たる製品は、阿波藍ですが、ここでは「茎ずくも」をご紹介します。「藍粉成し」(あいこなし)で選別された茎を、屋根で覆われた保管場所に入れ、自然乾燥します。乾燥した茎を庭に出し、水をかけて攪拌します。徐々に発酵して、阿波藍に良く似た形状になりますが、手間ひまかけて製造する阿波藍と違って、その工程は非常に単純です。寢床のような建物は必要なく、図10のように庭に広げるだけですし、「切り返し」後は、「むしろ」ではなく、ビニールの覆いをかけ雨を凌いでいます。出荷先は、合成藍を使って染めている2社の染工場です。阿波藍を使う染工場のように高級品を製造するものではありませんが、特殊なもの(剣道の防具等)に使われているようです。

吉田家(吉田花子氏)

徳島県徳島市応神町の吉田家の入り口には、石碑が置かれ、そこには先代の秋三郎氏が昭和53年に、阿波藍製造技術保存会の技術保持者に認定されたことが記されています。

吉田家の現在の当主は吉田花子氏で、阿波藍製造技術保存会の会員です⁵⁾。花子氏は、阿波藍の製造だけでなく、時おり、求めに応じて、阿波藍を使った藍建て技法や藍染技術のワークショップを開催しています。そのため、寢床の横に染色スペースを設置し、阿波藍の普及にも貢献しています。

後継者の吉田愛二氏は、その準会員で、現在、吉田藍商店の阿波藍は、愛二氏が中心になり製造しています。愛二氏は教育者としての仕事の傍ら、伝統的な寢床と道具を使って、阿波藍の伝統を守り続けています。

武知家(武知毅氏)

武知家は200年間以上、阿波藍を製造し、伝統的な製造方法を維持しています⁶⁾。当主の武知毅氏は、後継者をま

図10 茎ずくも

だ決めていませんから、阿波藍製造技術保存会の会員ではありません。その製造量は、1970年は徳島県の約8.9%、1985年は約3.0%、および2000年は約2.0%と小規模でしたが、兼業ながら、毎年途切れず製造し続けています。

徳島県名西郡石井町にある武知家の主屋は、1862年に建立されました。敷地は南北約80m、東西約40mの広さを誇っています。その敷地内の寢床は、徳島県指定有形民俗文化財で、現在も使われています。道路側から見ますと、小窓がたくさん並んでいます。阿波藍を製造する時、発酵によって阿波藍は熱を発散し、湯気が立ちます。これらの小窓は、採光のためというより換気のために使われています。内庭から見ますと、寢床の出入り口には屋根のついた広い空間を取っています。ここは、「藍粉成し」(あいこなし)のときに雨が降ってきますと、一時的に藍を集積させる場所として使用されています。

参考文献

- 1) 藍の色模様、阿波あい生産振興部会パンフレット.
- 2) 鳥羽清、農業および園芸、**50**、199(1975).
- 3) 川人美洋子、染色工業、**46**、569(1998).
- 4) 阿波あい生産振興部会総会資料.
- 5) 阿波藍製造技術保存会総会資料.
- 6) 高川原村史編纂委員会「高川原村史」(1959).